

## 北京超有名中学訪問記

渡辺哲司（高等教育総合開発研究センター）

2004年の9月6-9日に、科研費の海外調査として訪れた北京市の五中学（北京師範大附属実験中学、中国人民大学附属中学、北京大学附属中学、北京市第四中学、北京市第二中学）について見聞をまとめた。訪問団は、白川友紀（情報工学・筑波大）、渡邊公夫（数学・筑波大）、杜威（数学教育・秋田大）、南部広孝（高等教育・長崎大）の各氏と、筆者（発達学・九州大）であった。

なお、本報告には以下のような留意点がある。

- i. 内容はホスト側の説明（発言、一部は印刷物から引用）に従ったもので、真偽は確認されていない。
- ii. ホスト側との間で交わされた情報は、ほとんどすべて、秋田大・杜威教授の通訳を介している。
- iii. 現地の校名は「中学」だが、文中、日本の高校に当たる「高級中学」は「高校（高）」、同じく中学校にあたる「初級中学」は「中学（中）」の語をあてた。

## &lt;概観・要点&gt;

まず、訪問した全ての中学で共通して得られた情報を列挙する。

- i. あらゆる場面で、数学のパフォーマンスは特異的に重視される。特に優秀な者や実績がある者は、中・高・大の入試で優遇され、校内でも特別クラスに入るなど。
- ii. 数学に次いで重視される科目は理科（物理、化学、生物）、情報、英語（順不同）。
- iii. 教育成果の指標として、清華・北京大（次いで重点大）への進学者（数学（化学、物理など）オリンピックの受賞者、政府から受ける表彰、顕彰、モデル校指定）等が挙げられる。
- iv. それら教育成果の原因として、生徒の優秀さと同等以上に、教師の優秀さがよく挙げられる。
- v. 全体的に、優秀な個人（生徒、教師とも）が明確に顕彰される風潮がある。
- vi. 生徒の自主的な学習態度を育むものとして、「選修」科目の多さが強調される。
- vii. 中高一貫教育の開始（再開）拡大が企図されている。
- viii. 教育施設・設備の面では、日本の大学をすら凌ぐ部分が確実にある。

次に、個々の学校で特異的に得られた情報を列挙する（ただし、本当に特異的か否かは不明）。

- i. 二中、四中では、学校の沿革、教育目的などに「庶民」の語が頻出。
- ii. 人民大附中、北京師範大附実験中では、数学のパフォーマンスを一層高めるために、小学三・四年生にも（将来の入学を見越した）積極的な働きかけをしている。
- iii. 二中では、学校の教育理念や成果の裏付けとなり得るような、大学卒業後の進路調査がなされていた。

## &lt;課題・興味&gt;

訪問先の学校では、おしなべて明るく前向きな雰囲気が感じられた。それは、学習すること、良い成績を挙げることに、一流大学へ進学すること等の意味が、おそらく日本よりずっと明快なためではないかと想像される。

ただしそれは、教育的な価値観の単純さも同時に暗示する。産業社会が成熟し、高等教育がいつそう拡大した未来、おそらく学歴が社会的成功を保証しない社会に、生徒や教師の意識はどのように変化するだろうか。

ホスト（学校、教師）側の説明だけでは、内容の客観性や信頼性が判断できない。また、現実には「こうである」と、理想的に「こうありたい・あるべき」との区別も難しい。正確な理解には一層の吟味が必要である。

生徒の生活レベルからみた場合と同じ情報を得、同じ解釈ができるか否かにも興味もたれる。また、発達学的な視点からは、“エリート”生徒・学生が育つ背景、メカニズムにも興味湧く。

それに関連して、高研センターの調査プロジェクトとして、「世界の受験生」を提案したい。日本の受験生・受験界を相対化してみせることは、現代の日本において意外な面白さを持つように思われるのである。